

復興支援プロジェクトシンポジウム2014

復興への“声”を伝える

～ソーシャルワーカーのまなざしと
歩みの継承へ～

日時 平成 26年 2月 8日 (土)

開会 13時00分

開会 16時45分

場所 文京学院大学本郷キャンパス

D館6階スカイホール

主催 福祉系大学経営者協議会

この事業は 独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業 の助成を受けています。

「復興支援プロジェクトシンポジウム2014」プログラム

- 13:00 開会 福祉系大学経営者協議会会長挨拶
文京学院大学 理事長 島田 燐子
- 13:05 “声”プロジェクト概要説明
関西福祉科学大学 准教授 遠藤 洋二
- 13:25 講演
宮城県社会福祉士会 事務局長(常務理事) 高橋 達男
- 14:25 休憩
- 14:35 学生発表
文京学院大学 人間学部4年 小野 綾子
淑徳大学 総合福祉学部3年 大藤 未来
日本社会事業大学 社会福祉学部 平成24年度卒 野澤 千明
- 15:20 休憩
- 15:30 パネルディスカッション
コーディネーター
文京学院大学 教授 鳥羽 美香
宮城県社会福祉士会 事務局長(常務理事) 高橋 達男
同志社大学 教授 上野谷 加代子
文京学院大学 人間学部4年 小野 綾子
淑徳大学 総合福祉学部3年 大藤 未来
日本社会事業大学 社会福祉学部 平成24年度卒 野澤 千明
- 16:45 閉会

災害支援プロジェクトシンポジウム 2014

復興のへの“声”を伝える

— ソーシャルワーカーのまなざしと歩みの継承へ —

2014年2月

関西福祉科学大学 遠藤 洋二
(福祉系大学経営者協議会復興支援委員長)

関係学会・シンポジウムにおいて……

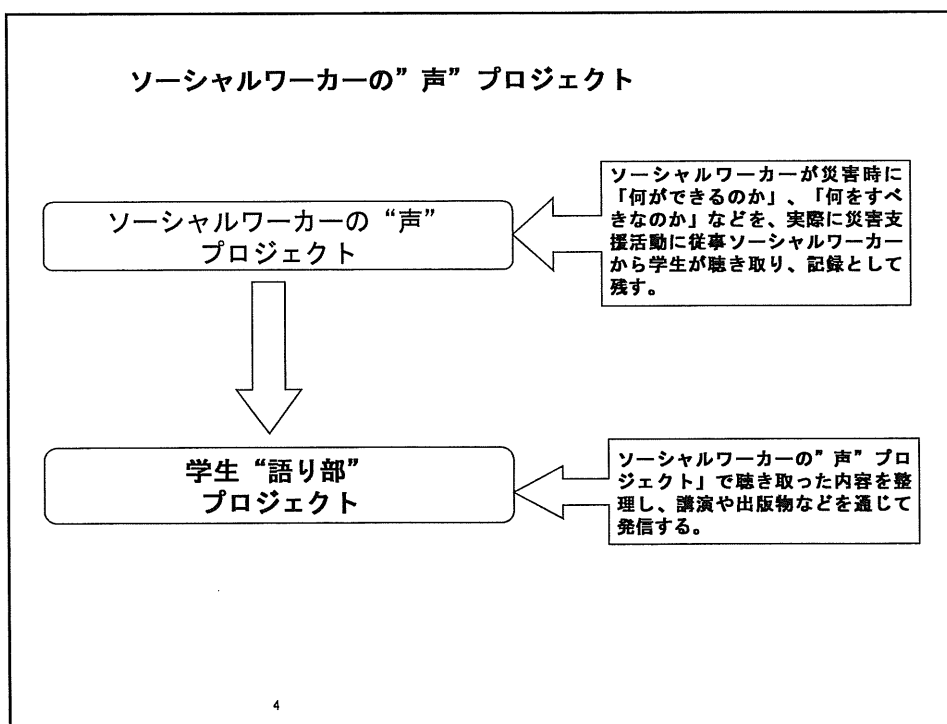
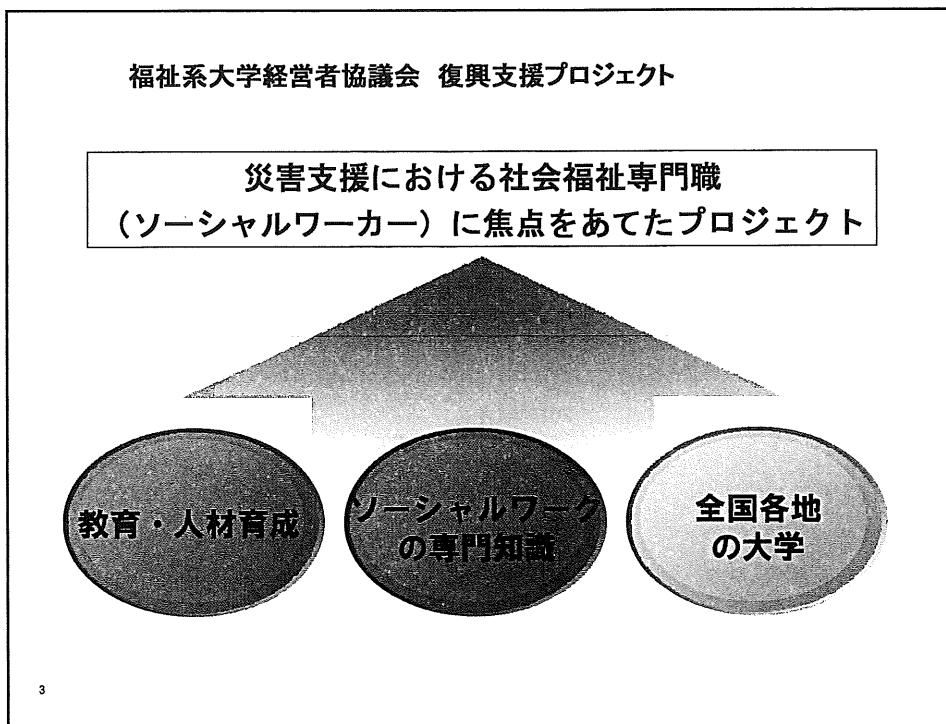
発災直後は救急救命が最優先され、生活支援を主体とするソーシャルワークは、被災者の生命身体
の安全確保がされてからその機能を発揮する

災害によってソーシャルワーカーが活用する社会
資源が破壊され、「資源とつなぐ」機能が失われ
たため効果的な援助ができない

被災地におけるソーシャルワーカーの援助対象
があまりにも広範であり、一般化、抽象化するこ
とが困難である

発表者の実体験(阪神淡路大震災)と乖離

実態を
知りたい



ソーシャルワーカーの“声”プロジェクト

5

“声”プロ：プロセス

事前学習

- ・各大学で実施

フィールドワーク

- ・座学（講演）
- ・視察
- ・インタビュー
- ・グループ討議

期間：4泊5日
チーム：学生4名
教員1名

事後作業

- ・インタビューの逐語録を作成
- ・逐語録の分析
- ・報告書作成

6

“声” プロ：事前学習(関西福祉科学大学の例)

1日目	オリエンテーション 東北大震災の被害状況
2日目	被災者支援の基本
3日目	インタビューの方法(1)
4日目	インタビューの方法(2) ①阪神淡路大震災記念「人と防災未来センター」見学 ②阪神・淡路大震災で活動経験のあるソーシャルワーカーへのインタビュー
5日目	ソーシャルワーカーの業務

7

“声” プロ：フィールドワークの概要

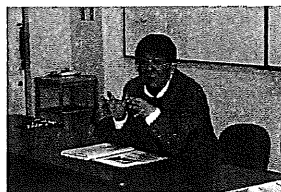
派遣区分	期間	活動場所	参加大学	学生	教職員	インタビュー
第1次	平成24年3月12日～3月17日	宮城県	文京学院大学	4	2	4
			関西福祉科学大学	8	3	6
第2次	平成24年8月21日～8月25日	岩手県	淑徳大学	4	1	2
			日本社会事業大学	4	3	2
			中部学院大学	4	1	2
	平成24年9月3日～9月7日	宮城県	関西福祉科学大学	4	3	2
文京学院大学			4	3	2	
第3次	平成25年3月3日～7日	宮城県	日本福祉大学	4	3	2
			淑徳大学	4	2	2
			中部学院大学	4	1	2
第4次	平成25年8月20日～24日	福島県	関西福祉科学大学	4	2	2
			淑徳大学	4	2	2
			文京学院大学	3	3	2
			関西福祉科学大学	4	3	2

8

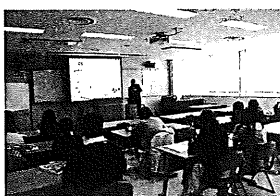
フィールドワーク:座学



岩手県社会福祉士会
佐々木 裕彦 氏



宮城県社会福祉士会
鈴木 守幸 氏



福島県社会福祉士会
島野 光正 氏

9

フィールドワーク:視察風景



宮城県東松島市



福島県富岡町



岩手県陸前高田市

10

フィールドワーク: インタビューの概要(年3月15日~16日)

- ◆対象者は各県社会福祉士会がコーディネート
- ◆各チーム2名のソーシャルワーク(社会福祉士)へインタビュー
- ◆半構造化
- ◆了解を得た上で録音
- ◆2名の学生がインタビューを行い、残りの学生は記録

11

フィールドワーク: インタビュー風景



宮城県登米市 地域包括支援センター



宮城県石巻市 地域包括支援センター



岩手県宮古市 社会福祉協議会

12

フィールドワーク:インタビュー先(第1次派遣:宮城県)

派遣区分	派遣先	所属	実施日
1次	宮城	石巻市雄勝地域包括支援センター	H24.3.15
1次	宮城	石巻市渡波(わたのは)地域包括支援センター	H24.3.15
1次	宮城	東松島市地域包括支援センター	H24.3.15
1次	宮城	南東北病院・医療福祉相談室	H24.3.15
1次	宮城	気仙沼市地域包括支援センター	H24.3.16
1次	宮城	南三陸町地域包括支援センター	H24.3.16
1次	宮城	亶理町地域包括支援センター	H24.3.16
1次	宮城	名取西地域包括支援センター	H24.3.16

13

フィールドワーク:インタビュー先(第2次派遣:岩手県・宮城県)

派遣区分	派遣先	所属	実施日
2次	岩手	障がい者支援施設 吉浜荘	H24.8.23
2次	岩手	就労継続支援B型事業所 青松館	H24.8.23
2次	岩手	社会福祉法人 愛育会	H24.8.23
2次	岩手	社会福祉法人 三陸福祉会 さんりくの園	H24.8.23
2次	岩手	釜石市保健福祉部高齢介護福祉課地域包括支援センター	H24.8.24
2次	岩手	大槌町役場 福祉課 民生部	H24.8.24
2次	岩手	山田町保健・老人福祉センター	H24.8.24
2次	岩手	宮古市総合福祉センター	H24.8.24
2次	宮城	仙台市向陽台地域包括支援センター	H24.9.5
2次	宮城	特別養護老人ホーム せんだんの里	H24.9.5
2次	宮城	多賀城市役所 社会福祉課	H24.9.6
2次	宮城	仙台市泉中央地域包括支援センター	H24.9.6

14

フィールドワーク: インタビュー先(第3次派遣:宮城県)

派遣区分	派遣先	所属	実施日
3次	宮城	登米市中田・石越地域包括支援センター	H25.3.5
3次	宮城	株式会社 宮城登米広域介護サービス	H25.3.5
3次	宮城	虹の丘地域包括支援センター	H25.3.5
3次	宮城	スキップケアプランセンター	H25.3.6
3次	宮城	涌谷町居宅介護支援事業所	H25.3.6
3次	宮城	特別養護老人ホーム・せんだんの里	H25.3.6

15

フィールドワーク: インタビュー先(第4次派遣:福島県)

派遣区分	派遣先	所属	実施日
4次	福島	介護老人保健施設 檜葉ときわ園	H25.8.22
4次	福島	渡辺 明社会福祉士事務所	H25.8.22
4次	福島	障害者支援施設 あだたら育成園	H25.8.22
4次	福島	大熊町役場 スクールソーシャルワーカー	H25.8.23
4次	福島	社会福祉法人 いわき福音協会法人本部	H25.8.23
4次	福島	福島県社会福祉士会 事務局	H25.8.23

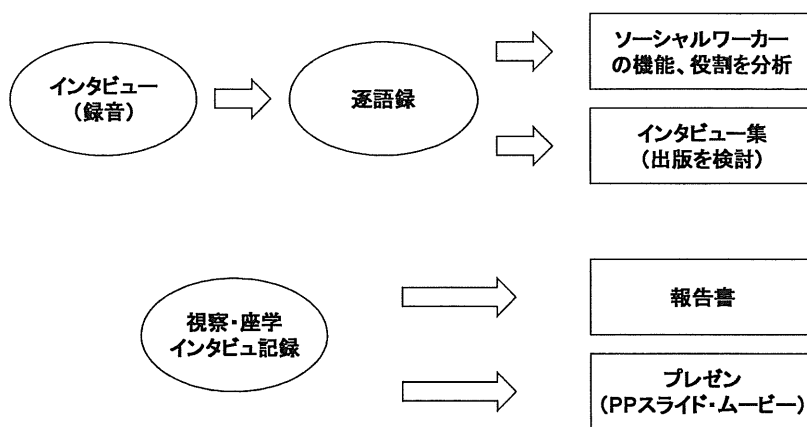
16

フィールドワーク:グループ討議



17

“声” プロ：事後作業

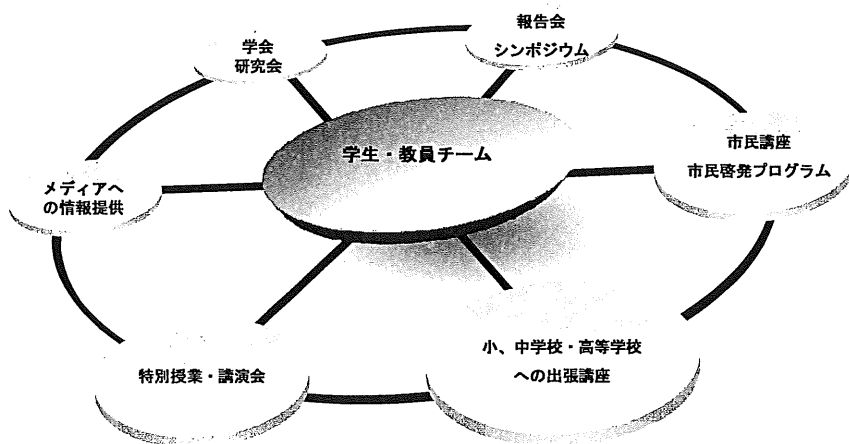


18

学生“語り部”プロジェクト

19

語り部:概要



20

語り部:報告会・シンポジウム

年月日	行事	開催場所
2013年12月1日	岩手県社会福祉士会との意見交換会	岩手県盛岡市
2013年12月8日	福島県社会福祉士会との意見交換会	福島県郡山市
2013年12月28日	宮城県社会福祉士会との意見交換会	宮城県仙台市
2014年2月8日	東京地区シンポジウム	文京学院大学
2014年2月17日	名古屋地区シンポジウム	日本福祉大学

21

語り部:市民講座・市民啓発プログラム

年月日	行事	開催場所
2012年5月3・4日	中之島まつり	大阪市
2012年11月10・11日	学園祭“美葉祭”	関西福祉科学大学
2012年12月22日	市民講座	豊中市
2013年11月16・17日	学園祭“美葉祭”	関西福祉科学大学



2012年11月10日「学園祭“美葉祭”」

「中之島まつり」同様、ブースを設けて活動報告を行いながら、「南三陸復興ダコの会」が販売しているキャラクターグッズを学園祭で委託販売を行い、売上金額の全額を送金しました。「南三陸復興ダコの会」は、この大震災で仕事を失った被災者たちの仕事を創出しようと地元 Yes工房を拠点に被災者が力をあわせて作った事業所で、自分たちで作った製品をショップやギャラリーで販売しています。目玉は、金色のタコが「はちまきを巻いた置物(ゆめ多寺鎮)」「オクトパス君(置く&バス)」で置く&試験に合格するという縁起物とあって、国家試験に合格したい学生たちには大人気でした。同会の商品が学園祭で販売されるのは初めてだったそうですが、盛況のうちに終了しました。

22

語り部:小、中学校・高等学校等への出張講座 (1)

年月日	行事	開催場所
2012年11月20日	大阪府立貝塚高等学校	貝塚市
2013年1月29日	奈良県立榛生昇陽高等学校	奈良県宇陀市
2013年2月14日	大阪府立西成高等学校	大阪市
2013年2月18日	大阪府立西成高等学校	大阪市
2013年6月4日	大阪府立大学	大阪市
2013年6月25日	龍谷大学	滋賀県大津市
2013年9月2日	大阪府立みどり清朋高等学校	東大阪市
2013年9月26日	大阪府立金剛高等学校	富田林市
2013年10月28日	大阪府立八尾北高等学校	八尾市
2013年11月1日	大阪府立八尾北高等学校	八尾市

23

語り部:小、中学校・高等学校等への出張講座 (2)



2013年1月19日
「奈良県立榛生昇陽高等学校」

プロジェクトメンバーの母校で、福祉科の高校3年生35名を対象に授業を行いました。この高校生の中には、4月から関西福祉科学大学生になる生徒が5名もあり、休憩中には高校生たちとも話ができて、非常に和やかなものになりました。福祉科の高校生らしく、非常に活発なディスカッションでプロジェクトメンバーが脱帽していました。



2012年11月20日
「大阪府立貝塚高等学校」

【貝塚高等学校で授業を受けた高校生からの感想】

今日教えていただいて、これをまた自分たちが周りの人に伝えることで輪が広がっていくと思う。頑張ったり伝えるのはソーシャルワーカーの人だけではない。いつか日本全体に大きな地震が来るって聞くけど、来たら自分たちはどうなるんだろうって思った。

ソーシャルワーカーの人がいろんな職種の人とつながっているって知らなかった。

初めてソーシャルワーカーということを知りました。どんなことをしているのかわらなかつたけど、今日でよくわかりました。自立つ仕事じゃないけれど、必要でとても大切な仕事なんだとおもいました。

24

語り部：学会・研究会

年月日	行事	開催場所
2012年9月22日	ユース・ミーティング～阪神・淡路大震災記念人と防災未来センター	兵庫県神戸市
2012年11月28日	神戸市福祉職員新任研修会	兵庫県神戸市
2013年2月8日	大阪府社会福祉士会	堺市
2013年7月16日	日本社会福祉学会第61回秋季大会 特定課題セッション	札幌市



2012年11月28日
「神戸市福祉職員新任研修会」

神戸市福祉職員の新任研修会において発表しました。職員から災害時ソーシャルワーカーとして何を優先すべきか、医療的技術のないソーシャルワーカーの価値、市民が行政に対してどうあってほしいと思っているかなどが質問として出され、ディスカッションを行いました。

【参加者の意見】
災害時にソーシャルワーカーとして何をすべきかということを考えたことがありませんでした。しかし、みなさんの発表を聞いて、普段のソーシャルワークが危機的状況の中で生きていくことに気付かされました。
地域の交流や他機関との連携は、学生時代に思っていた以上に難しいですが、今回の発表の中でもあった「先を見越す必要性」から、普段の業務でより意識していかなければならないと思いました。
皆さんの活動は、現場で働くソーシャルワーカーにとって、とても励みになると思います。ぜひ活動の幅を広げ、より多くの人達にソーシャルワーカーの「声」を届けていただければ嬉しいです。

語り部：メディアへの情報提供（1）

語り部:メディアへの情報提供 (2)

424.9.29 朝刊



被災地のソーシャルワーカー(左)に聞き取り調査を行う学生たち



関西福祉科学大(2) ソーシャルワーカーの"声"プロジェクト

大学**の**挑戦

被災地の生活支援から学ぶ

【神戸新聞】被災地の生活支援から学ぶ。被災地での生活支援活動を通じて、被災地の生活支援の現状や課題を調査し、その成果を社会に還元する。関西福祉科学大(2)の「ソーシャルワーカーの"声"プロジェクト」が、被災地の生活支援活動を通じて、被災地の生活支援の現状や課題を調査し、その成果を社会に還元する。

「被災地の生活支援活動を通じて、被災地の生活支援の現状や課題を調査し、その成果を社会に還元する。関西福祉科学大(2)の「ソーシャルワーカーの"声"プロジェクト」が、被災地の生活支援活動を通じて、被災地の生活支援の現状や課題を調査し、その成果を社会に還元する。」

「被災地の生活支援活動を通じて、被災地の生活支援の現状や課題を調査し、その成果を社会に還元する。関西福祉科学大(2)の「ソーシャルワーカーの"声"プロジェクト」が、被災地の生活支援活動を通じて、被災地の生活支援の現状や課題を調査し、その成果を社会に還元する。」

語り部:メディアへの情報提供 (3)

424.9.29 朝刊



被災地のソーシャルワーカー(左)に聞き取り調査を行う学生たち



関西福祉科学大(2) ソーシャルワーカーの"声"プロジェクト

大学**の**挑戦

被災地の生活支援から学ぶ

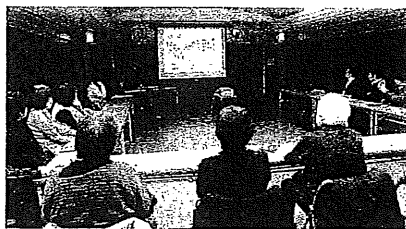
【神戸新聞】被災地の生活支援から学ぶ。被災地での生活支援活動を通じて、被災地の生活支援の現状や課題を調査し、その成果を社会に還元する。関西福祉科学大(2)の「ソーシャルワーカーの"声"プロジェクト」が、被災地の生活支援活動を通じて、被災地の生活支援の現状や課題を調査し、その成果を社会に還元する。

「被災地の生活支援活動を通じて、被災地の生活支援の現状や課題を調査し、その成果を社会に還元する。関西福祉科学大(2)の「ソーシャルワーカーの"声"プロジェクト」が、被災地の生活支援活動を通じて、被災地の生活支援の現状や課題を調査し、その成果を社会に還元する。」

「被災地の生活支援活動を通じて、被災地の生活支援の現状や課題を調査し、その成果を社会に還元する。関西福祉科学大(2)の「ソーシャルワーカーの"声"プロジェクト」が、被災地の生活支援活動を通じて、被災地の生活支援の現状や課題を調査し、その成果を社会に還元する。」

語り部:メディアへの情報提供 (4)

被災地の復興と備えへ
課題分析し情報発信を



被災地の継続的な支援などを話し合った講座＝豊中市

被災地巡回の関西福祉科学大生ら
東日本大震災からの復興支援を考える公民館講座が22日、豊中市の市立豊池公民館で開かれ、ソーシャルワーカー(社会福祉士)精神保健福祉士(国家資格)の活動などについて、被災地を訪れた大学生らが報告、継続してできる支援について討議した。

実務報告では、ソーシャルワーカーを目指す関西福祉科学大(和泉市)社会福祉学科3年生、古瀬川和真さんら学生9人が8月、岩手県の被災地を回って感じたことをレポートした。3人は、被災者の「心のケア」から生活全般までを

支援するソーシャルワーカーも被災者で、いろいろな悩みを抱えているが、人と人をつなぐパイプ役になろうと前向きな「なぞ」を指摘。その上で、「何をすべきかのノウハウや問題を次の災害時の活動に役立つよう記録・分析し、社会に情報発信したい」と強調した。

このほか、被災地で演義活動をした和泉市議の村下正幸さん(豊中市在住)が岸和田市を演義。最後に「継続してできる支援活動について」をテーマ

2012年12月23日 産経新聞

29

語り部:特別授業・講演会

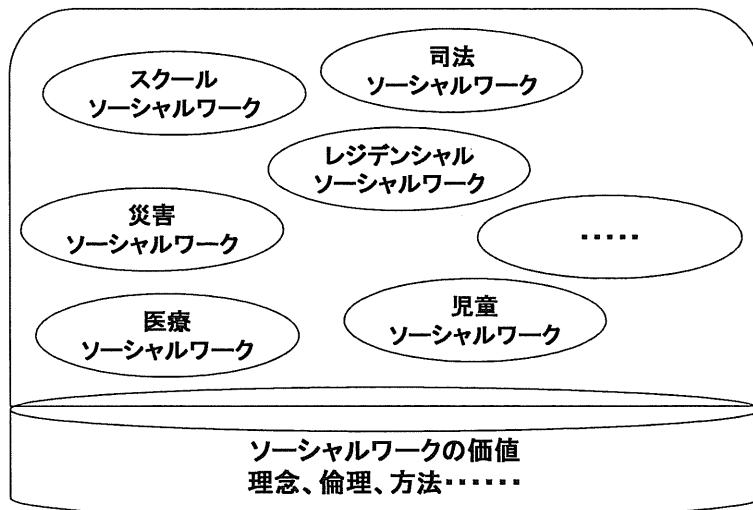
年月日	行事	開催場所
2012年3月25日	日本社会福祉学会連合における東日本大震災対応委員会の活動報告	文京学院大学
2012年11月10日	2012年度全国社会福祉教育セミナー	東北福祉大学

30

大規模災害発生直後におけるソーシャルワーク機能に関する一考察

31

災害ソーシャルワーカーと位置付け



32

災害ソーシャルワーカーの展開

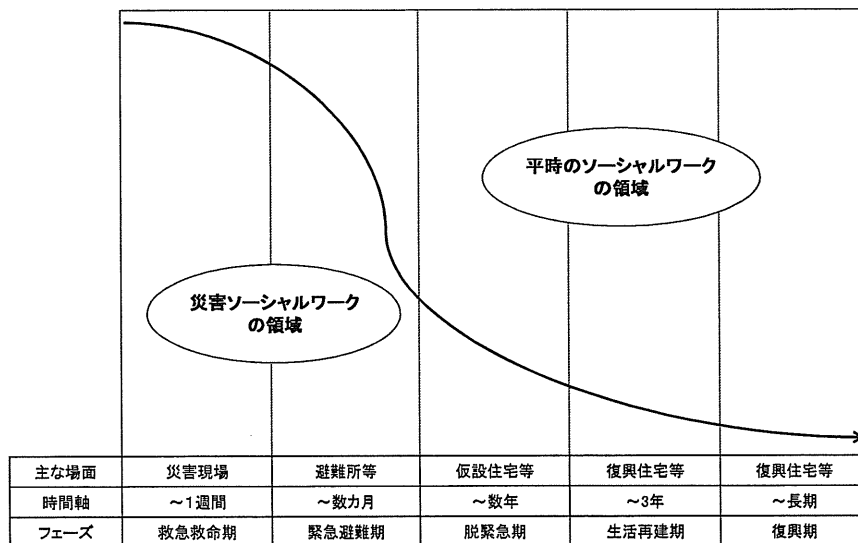
表2-1 災害に想定される被災者ニーズの時系列変化に対応したソーシャルワークの内容・方法

期 間	災害以前	被災直後～1週間	～半年	～数年	～長期
想定される場面	地域	救出・避難	避難所生活	仮設住宅生活	復興住宅生活・自宅再建
災害ソーシャルワークの内容	①防災への関心喚起の啓発活動 ②災害に備えた住民の学習支援 ③住民自治を支援する購買力の強化支援・協賛・紹介 ④災害被害の把握(常時更新)・地域組織づくり	①要援護者の安全確保・発見 ②発見した要援護者のニーズへの対応とモニタリング ③要援護者の手配 ④必要物資の確保と供給 ⑤安全で衛生的な環境の確保 ⑥仮設家屋等のきつづけ、移居先(必要な物品の探求)の確保(手配してくれるボランティア・NPO等(専門技術を持つ人も含む)の募集・確保・配属・配置) ⑦避難所のコーディネート支援 ⑧住宅支援組織や専門家との連携、協賛支援 ⑨生活・福祉相談窓口の設置と対応 ⑩被災を受けた専門機関、施設情報、専門職情報、また各種制度をはじめとする資源情報の収集や発信 ⑪生活支援や生活資金の紹介、融資	①コミュニティ再構築 ②見守り体制の構築 ③オンラインでソーシャルワークづくり等を通じた孤立や、ひきこもり、常用居場所の防止 ④様々な社会資源の紹介、情報提供	①コミュニティ再構築 ②見守り体制の構築 ③オンラインでソーシャルワークづくり等を通じた孤立や、ひきこもり、常用居場所の防止 ④様々な社会資源の紹介、情報提供	①コミュニティ再構築 ②見守り体制の構築 ③オンラインでソーシャルワークづくり等を通じた孤立や、ひきこもり、常用居場所の防止 ④様々な社会資源の紹介、情報提供
災害ソーシャルワークで用いられる方法・視座	啓発・教育・組織化・ネットワーキング	アウトリーチ・ニーズキャッチ・アセスメント・プランニング・ネットワーク・チームワーク・コーディネート・資源開発・組織化・モニタリング・エンパワメント・アドボカシー・評価	アウトリーチ・ニーズキャッチ・アセスメント・プランニング・ネットワーク・チームワーク・コーディネート・資源開発・組織化・モニタリング・エンパワメント・アドボカシー・評価	アウトリーチ・ニーズキャッチ・アセスメント・プランニング・ネットワーク・チームワーク・コーディネート・資源開発・組織化・モニタリング・エンパワメント・アドボカシー・評価	アウトリーチ・ニーズキャッチ・アセスメント・プランニング・ネットワーク・チームワーク・コーディネート・資源開発・組織化・モニタリング・エンパワメント・アドボカシー・評価
支援における災害ソーシャルワークの特徴	予防的視点	緊急対応 救急・生活維持 外部からの応援(ソーシャルワーク版「D-MAT」)		生活再建 自立支援 自己実現 自己重視 ニーズ広範・多様化へのきめ細かな対応	

川上富雄(2013)「災害ソーシャルワーカーの展開」『災害ソーシャルワーク入門』、中央法規

33

災害ソーシャルワーカーと平時のソーシャルワーク



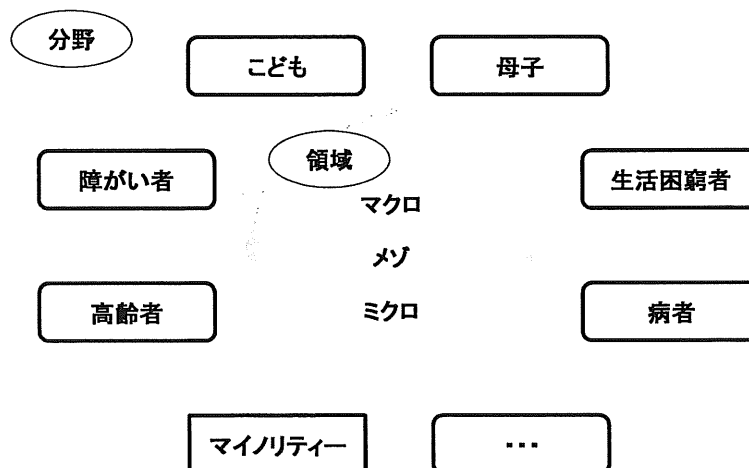
34

災害発生直後のソーシャルワーカーの行動・想いに関するカテゴリ

＜カテゴリ＞	＜サブカテゴリ＞
＜危機介入＞	1 安全の確保 2 被災者への直接的ケア 3 避難所での支援 4 安否確認
＜関係調整＞	1 地域住民との話し合い 2 避難所の環境調整 3 避難者摩擦への対応 4 関係機関との調整
＜状況へのアプローチ＞	1 状況の確認 2 生活がしづらい状況にある人への気づき 3 全体的に見ること
＜連携・協働＞	1 日頃からのつながり 2 地域の支え 3 携帯電話でのやり取り 4 仲間の存在 5 行政への不満 6 職能団体との連携 7 ボランティアへの対応
＜相談支援＞	1 情報収集 2 アセスメント 3 制度・資源の活用
＜自己犠牲＞	1 自宅に戻ったのは1週間後 2 無力感 3 行政としての責務と罪悪感

35

平時におけるソーシャルワークの枠組み



36

災害直後のソーシャルワーク機能に関する一考察

大規模災害発生

状況への介入

“まるごと支援”

- | | | |
|---|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・ 既存組織の機能不全 ・ 対象者の不明 ・ 情報不足 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 崩壊 (collapse) ・ 危機 (crisis) ・ 混乱 (confusion) ・ 葛藤 (conflict) | <ul style="list-style-type: none"> ・ 状況のアセスメント ・ ニーズ、資源調査 ・ スクリーニング ・ 介入プラン |
|---|---|---|

37

①崩壊 (collapse)への介入

ある病院のソーシャルワーカーは、災害直後に同系列法人の特別養護老人ホームに応援に入った。当該ホームは津波により1階部分が浸水したため、階上で入所者をケアしていた。職員は限られた機材で介護度の高い高齢者をケアしており限界に達していたものの、何とかホーム内でケアを継続しようとしていた。状況をアセスメントしたソーシャルワーカーは、ホームでの支援継続は困難と判断し、法人理事者、自治体と連絡調整した上、県外施設の受け入れ先を探し、自衛隊のヘリコプターで入所者全員を移送した。つまり、「崩壊した状況」に介入し支援の可能性を評価するとともに、事実を把握し決定権者に伝えることによって適切な判断に導いた。

38

②危機 (crisis)への介入

地域包括支援センターのソーシャルワーカーは、担当していた高齢者の安否確認をしながら瓦礫が散乱する地域を廻り、援助の必要な被災者を発見しようとしていた。津波で大きな被害が出たある地域では住民の大部分が避難する中、崩れかけていた家屋に避難所に行こうともしない介護が必要な高齢者がいた。高齢者はひとり暮らしで、近親者は遠方に暮らしていた。災害直後の混乱した状況にあり通信手段も確保されておらず、要介護高齢者を受け入れる福祉避難所は当該地域にはなかった。ショートステイなどの介護保険サービスの利用も当面は困難であった。高齢者自身も地域を離れることに抵抗を示したため、ソーシャルワーカーは、近親者への連絡あるいは受け入れ先の確保のために数日間はおかかると判断し、比較的被害が軽微な近隣住民に高齢者の一時的避難を依頼し「危機的な状況」を回避しようとした。

39

③混乱 (confusion)への介入

あるソーシャルワーカーが勤務する特別養護法人ホームは、地震、津波による直接的被害はなかったため、近隣に住む多数の被災者が避難してきた。ホーム側は空きスペースを開放し被災者を受け入れたが、職員や物資が十分に確保できていない中、入所者のケア、被災者の支援を同時に行わなければならない極度の「混乱状況」にあった。被災者は近隣住民が大多数であったため、地域ごとに民生委員、自治会役員などをリーダーとするグループに分け、定期的にリーダーと施設が協議する場を設けるなど、被災者と施設が共存できるシステムを構築した。

40

④葛藤 (conflict)への介入

自治体に所属するソーシャルワーカーは、状況把握の上指定避難所に出向いたところ、認知症高齢者の行動が他の避難者を苛立たせ、当該高齢者を排除しようとする動きに見て取れた。また、避難者の中には精神疾患、知的障がい者と思われる人が複数存在し、避難所の非日常的な環境に適応できていない状況を確認した。そこでソーシャルワーカーは、デッドスペースを片づけ、一定程度の避難者が寝れる場所を確保し、要援護者の対応スペースとし「葛藤状況」を緩和した。

41

プロジェクトの評価と今後の課題

42

プロジェクトの意義



43

ソーシャルワーカーの認知形成

1年が経った今でも、まだまだ苦しんでいる人がたくさんいて、その中でソーシャルワーカーという人たちが被災者の方の為にできることをたくさんやっていてすごいな、と思った。私にも何か出来ることがあるはずだから、考えて、やるべきだなと思った。(大阪府立金剛高等学校)

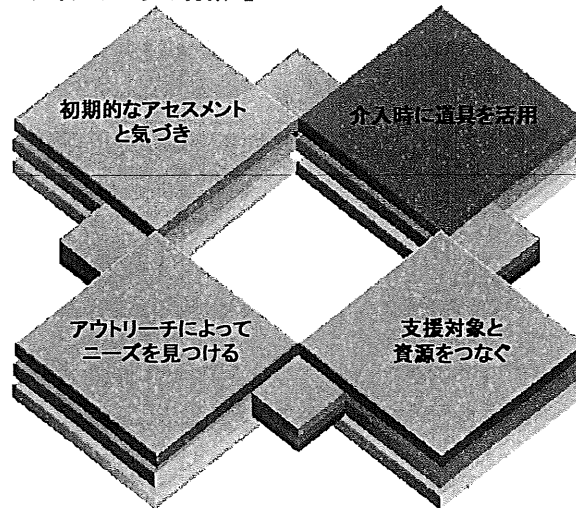
ソーシャルワーカーという存在を知りませんでした。今日の話を知り、やってみたくて本気で思いました。自分は今何もできないけど、ソーシャルワーカーとして働きたいと思いました。(大阪府立金剛高等学校)

ソーシャルワーカーはまだまだその役割内容について一般的には認識されていません。今日、学生さんたちの活動報告で学生さんたちもその役割や重さを実感されたと思います。と、ともに私も大変勉強になりました。人と人とを繋げていくということはすべてを失った人にとって命をつなぐということでもあると思います。自分にできることをこれからも見つけたいと思います。(大阪府豊中市蛍池公民館)

44

災害ソーシャルワークの構築

【 災害ソーシャルワークの特徴 】



関西福祉科学大学4年生：
泉・植田・黒住・篠原・寺田
が作成

デイブリーフィング

当事者として、あるいは支援が進行中であることも含め、自分自身の振り返りやまとめがまだまだできない状況にありましたので、本日皆様のご意見をお聞きしたり、学生さんの発表をお聞きすることは大変良い時間でした。気づきをたくさんいただきました。ありがとうございました。(3県社会福祉士会との意見交換会)

インタビューを受ける時、最初は面倒だと思いました。でも実際、ピュアな学生さんの姿に触れ、涙が出るくらい嬉しかったです。自分自身の震災後の活動を振り返る貴重な体験だったと思います。(3県社会福祉士会との意見交換会)

ソーシャルワーカーが“カッコいい”と思ってもらえて素直にうれしく思います。今回の震災で何があったのかを全国の仲間たちが見て聞いて、何を考えてくれるのが楽しみでもあります。学生の皆さんが考えて行っていくということの意味の大きさ 私も受け止めて“カッコいい”と言ってもらえるようなswを目指していきたいと思いました。皆さんと話ができた、皆さんから元気をもらった仲間がここにいることも忘れないうでください。(3県社会福祉士会との意見交換会)

一つの共通した思い

圧倒的無力感

後悔の念

過度の頑張り

- ・全てを失った被災者
- ・何もできない
- ・〇〇しかできない

- ・〇〇はできたかもしれない
- ・もっとできなかったのか

- ・問題の抱え込み
- ・オーバーワーク
- ・短期的視野

47

私たちの視点

圧倒的無力感

肯定的評価

災害支援
ソーシャルワーク

- ・被災者の暮らしに寄り添う
- ・被災者との関係性
- ・他機関(専門職)との連携
- ・感性と気づき

- ・できたこともたくさんある
- ・ソーシャルワーカーとしての役割

- ・災害時におけるソーシャルワークの機能・役割

48

学生教育

<災害に向き合う>

今回の活動は自分にとって価値観が変わる出来事だった。これから福祉を勉強するものとして、一人の人間としてどう震災と向き合っていくのかを考えたい。

<私たちに出来ること>

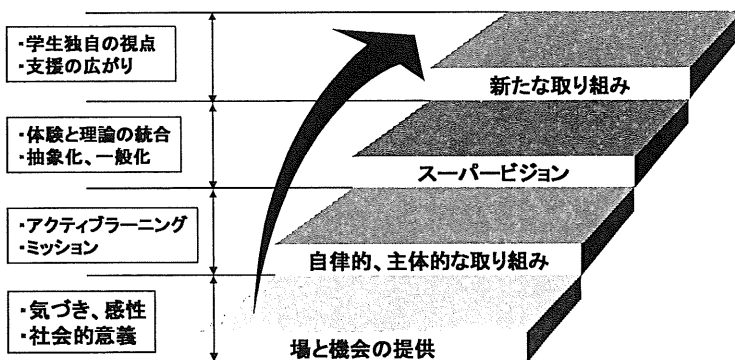
私は被災地で活動したソーシャルワーカーの声を聴き、震災の中で何が起こったのかという事実と同時にどのような想いで支援を行ったのか伝えていくことが、学生の私に出来る被災地支援だと考えている。

<ソーシャルワーカーの“想い”>

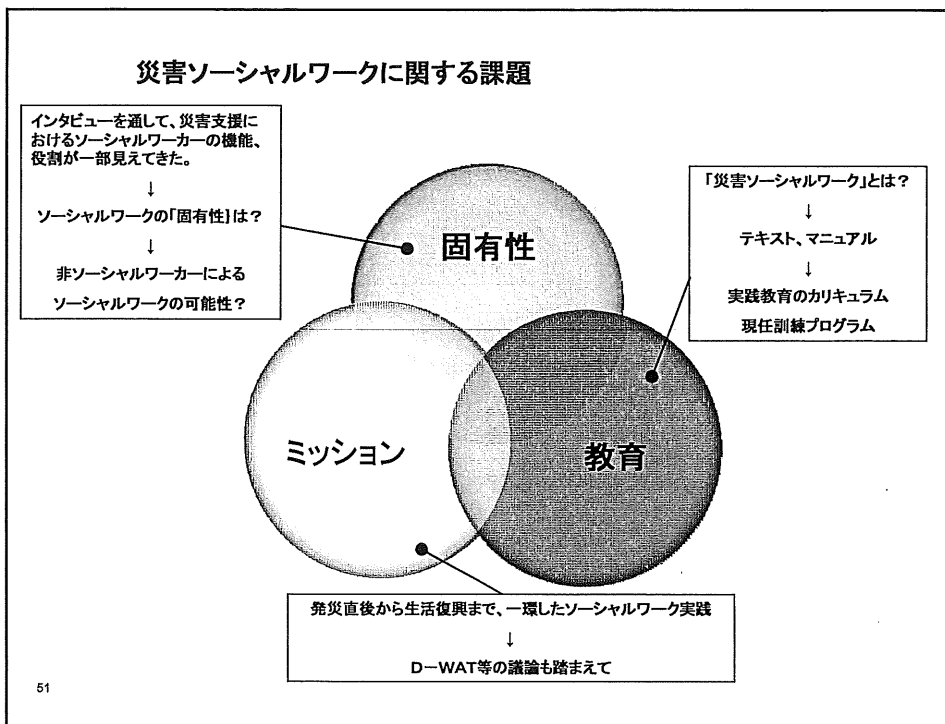
「平時も災害時もワーカーの姿がテレビ等で見えない」と不思議に感じた。しかし現地では、よりその人らしい生活へとワーカー自身も喜びや困難を感じながらも向き合っている姿を伺った。現場の方とともにソーシャルワーカーの存在、役割、おもいを伝え、広めていきたい。

49

学びの場として



50



ソーシャルワーカーの“声”を伝える

文京学院大学 人間学部 人間福祉学科 4年 小野綾子

- 期間 平成25年8月20日（火）～8月24日（土）
- 場所 福島県
- スケジュール①講義 福島県社会福祉士会会長 島野光正氏
②被災地訪問
(福島県双葉郡、宮城県名取市閑上地区等)
③ソーシャルワーカーインタビュー
介護老人保健施設 檜葉ときわ苑 施設長 渡辺幸雄氏
福島県社会福祉士会 事務局 和田由紀子氏
④グループディスカッション

ソーシャルワーカーの“声”プロジェクト第4次派遣概要



福島県社会福祉士会
会長 島野光正氏の講演

「福島県の現状とソーシャルワーカー」

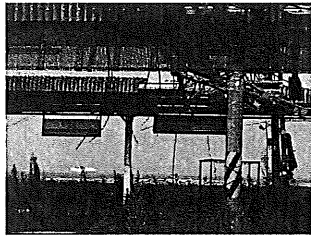
原子力発電所の事故により、
大きな被害を受けてしまっ
た福島県の現状と今後につ
いての講義を受けて

改めて福島の現状について
知る機会を得た

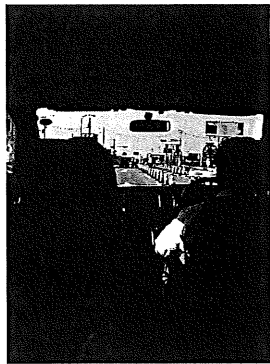


被災地訪問を通じて考えたこと

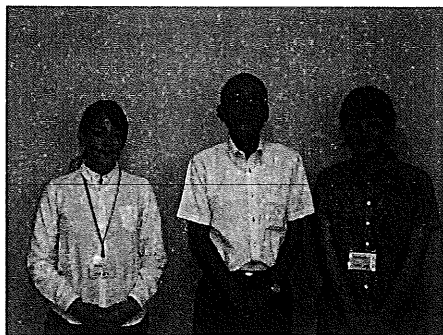
① 宮城県名取市関上地区



被災地②福島県双葉郡富岡町



被災地③ 福島県双葉郡周辺



介護老人保健施設 檜葉ときわ苑施設長 渡辺氏へのインタビュー



仮設介護老人保健施設開設に至る経過

介護老人保健施設 檜葉ときわ苑施設長渡辺氏より（檜葉町からいわき市へ移設）

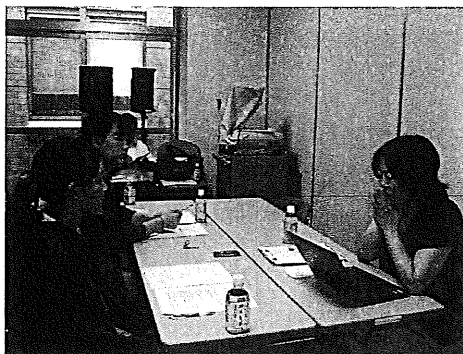
原発による避難生活で思うこと～施設での集団避難生活を経て

- ・職員も被災者・被害者である
- ・地震、津波により家族を失った職員もいた
- ・原発事故による避難にて、家族の安否すらわからない状態で、お世話する職員達

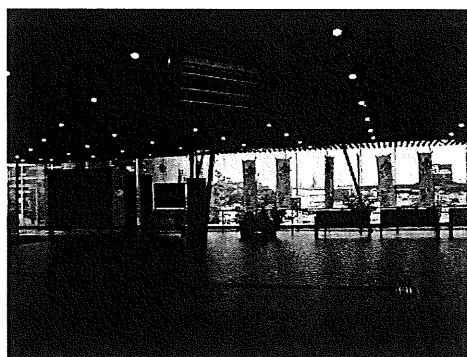
それぞれが苦しみを抱えながら、利用者を支えてきた

その中で何が出来たか～アドボカシーや個別化ソーシャルアクションの重要性

仮設であるということ、一いつかは故郷へ帰るといった願いをこめて



福島県社会福祉士会事務局和田由紀子氏へのインタビュー



福祉・医療の連携の重要性

福島県社会福祉士会 和田さんより

震災発生当時事務局として、施設や事業所で物資不足の中、必要なものを必要な場所へ届ける調整を中心に活動されていた。

県の社会福祉士会と介護支援専門員協会の会長が中心となって県内の職能団体が集まり、福島県相談支援専門職チームを2011年4月の初旬に立ち上げ、全県内に活動が広がっていった。

和田さんをはじめ支援者が避難所や事業所を回って情報を集めそれを支援に活かす。ネットワークが作られていった。福島県社会福祉士会はそのコーディネート役であった。

和田さんの活動は「一言でいえば交通整理をしていた」と振り返られた。これは施設ではない「事務局」だから出来たことである、と語られた。

ビッグパレットふくしま



ビッグパレットふくしま（郡山市）にも和田さんに案内して頂いた。

ここは福島県内最大の避難所だった場所で、一時期は2500名が避難していたという。

そこで相談支援チームはまず避難所のどこでどのようなニーズが発生しているのかを把握し、ニーズを支援につなげる活動を行ったという。



おたがいさまセンター 富岡町生活復興支援ボランティアセンター～仮設住宅における地域福祉の拠点

和田さんの案内で私達はおたがいさまセンター、仮設住宅地域にも訪問することが出来た。

グループディスカッション～ 振り返り



私達は最終日、グループディスカッションを行い、全体の振り返りを行った。さまざまな意見がかわされた。福島県は他の被災地と異なり、原発事故の影響を受けてしまったこと。そのため目に見えない放射線というものの恐怖により、いわれなき偏見をもたれてしまった現実がある。こうした困難な状況の中でも、復興にむけて、ソーシャルワーカーによる粘り強い取り組みがなされていたことに深く感銘を受けた。災害時におけるソーシャルワーカーの役割について、その重要性をインタビューを通して学んだ。

最後に

ソーシャルワーカーの声プロジェクトに参加しての感想

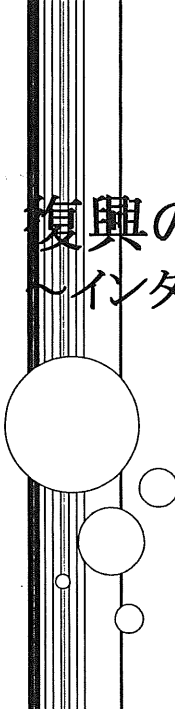
* 災害時のソーシャルワーカーの役割について

1. 被災者の表明されないニーズをいかに汲み取るか「声なき声を代弁」することの重要性。
2. 被災者に対し共感する力、受け止める力等ソーシャルワーカーの専門性が必要とされていた。
3. 震災時、混乱している中でもソーシャルワーカーの専門性は活かされていたと感じた。
4. ネットワークの大切さ→日頃の連携の積み重ねが重要。

* 自分自身、今後この経験をどのように活かしていくか考えさせられた。



ご清聴ありがとうございました。



復興の声を伝える ～インタビューを通して学んだこと～


淑徳大学 総合福祉学部
社会福祉学科 3年
大藤未来

ソーシャルワーカーの“声” プロジェクト 第3次派遣

場所:宮城県

日程:平成25年3月3日～3月7日

プログラム: ・講義(宮城県社会福祉士会)
・激甚被災地訪問
・SWr.へのインタビュー
・他大学合同グループ討議



参加するにあたって

- 行く前の自分の意志、意欲

(1)学生だからできることが本当にあるのか、
自分に務まるのかという不安な気持ち

(2)被災地のソーシャルワーカーが
どんな活動をしたのかを知りたい



被災地訪問を通して

- 私たち淑徳大学の学生は
松島市～石巻市雄勝町～名取市の
閑上地区を訪問した。

- 数枚の写真とともに、私の感じた思いを
述べさせて頂く。



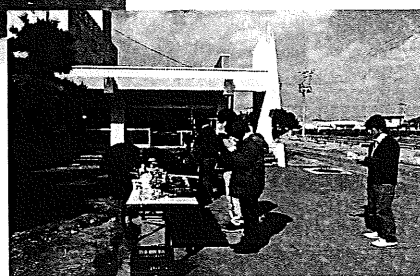
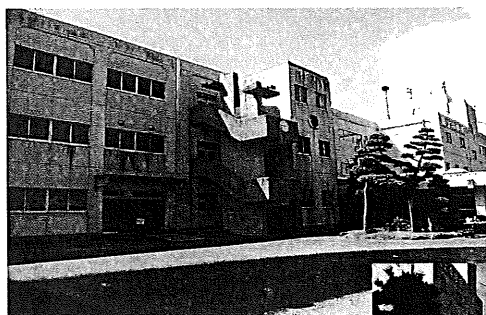
被災地訪問を通して

○石巻市雄勝総合市役所



被災地訪問を通して

○名取市関上中学校



被災地訪問を通して

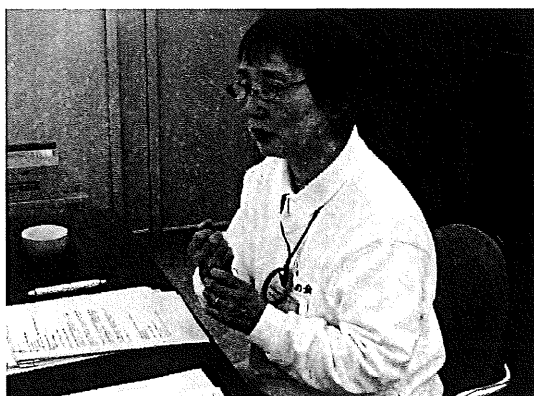
○名取市関上地区



インタビュー内容

○地域包括支援センター

板橋さん



インタビュー内容

- 宮城県スキップケアプランセンター
阿部さん



インタビューからの学び

- 災害時のソーシャルワーカーの視点と価値
(役割の本質)

(1)情報の統合

機能しなくなってしまった元のネットワークに
新しい情報を合わせて判断をしていく

(2)福祉は2番手ではない

「命を守る仕事」
救われた命を継続的に守っていく

インタビューからの学び

(3)存在の次元を支えていく

支援を通じて、安心感を与える

生きる意味、価値があると感じてもらう

(4)平時からの取り組み

被災地のソーシャルワーカーが行った

支援は急にできるものではない



グループ討議

○討議テーマ

“ソーシャルワーカーだからできたこと”

(1)「つなぐ」ということ

(2)見えないところも支援しようとする

○他大学との交流

(1)自分と同じSWr.を目指す人からの刺激

(2)自分自身の意識の変化



さいごに

○参加しての感想

- (1)インタビューによって引き出されるもの
- (2)日常では見えにくいものが見えた
- (3)非日常のなかで日常が鮮明になる機会
- (4)「忘れてはいけない」「伝えていきたい」

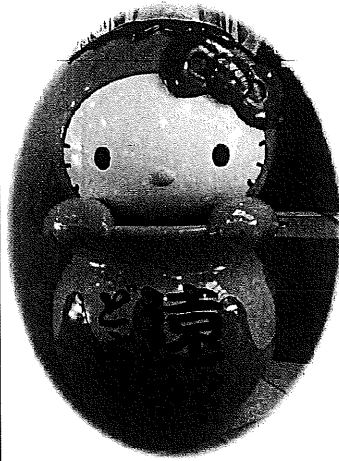


ご静聴

ありがとうございました。



ソーシャルワーカーの“声”プロジェクト に参加して



日本社会事業大学 社会福祉学部
福祉援助学科 平成24年度卒
野澤 千明

プロジェクトに参加した理由

- 震災をきっかけに被災地支援に興味を持った。
- ソーシャルワークを学ぶ学生として、災害時におけるソーシャルワークを学びたいと思った。

第二次派遣概要

- 場所:岩手県
- 日程:平成24年8月21日～25日
 - 21日 オリエンテーション、講義
 - 22日 激甚被災地視察、合同ミーティング
 - 23日 インタビュー
 - 24日 インタビュー、合同ミーティング
 - 25日 合同ミーティング

講義

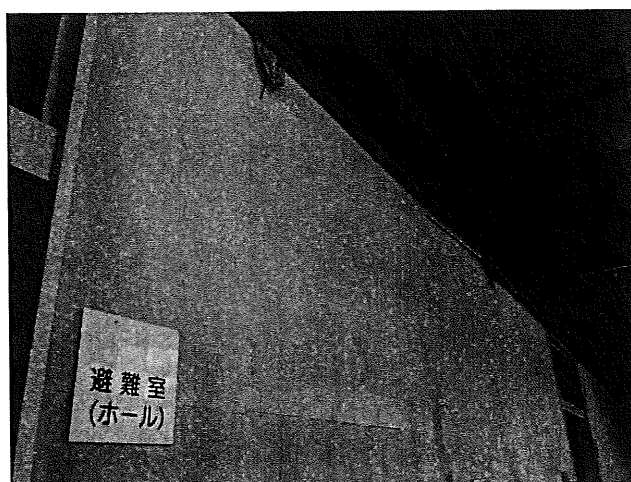
岩手県社会福祉士会の取り組み 事務局長 佐々木裕彦さん

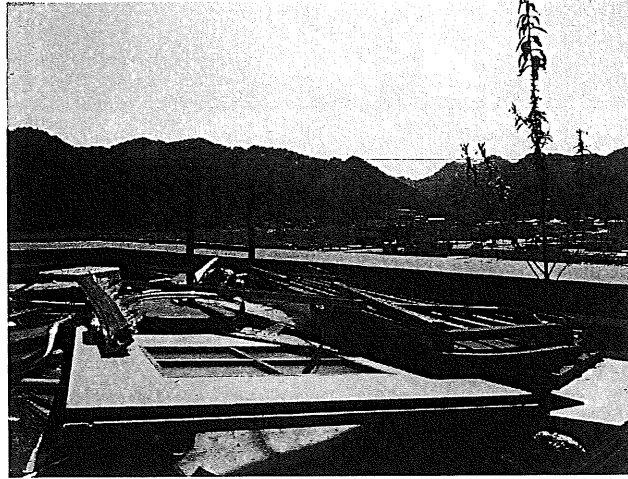
- 佐々木さんが理事を務めていらっしゃる「和敬会」のお話
 - 今回の震災時に行われた支援について
 - 今後構築が必要とされる支援システムや多職種連携について
- DWAT(Disaster Welfare Assistance Team)

激甚被災地視察

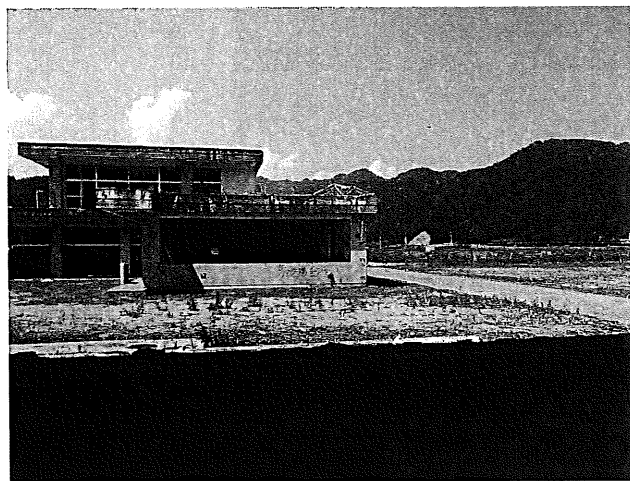
- 陸前高田市から釜石市にかけて視察

住民の避難場所としてあったホール





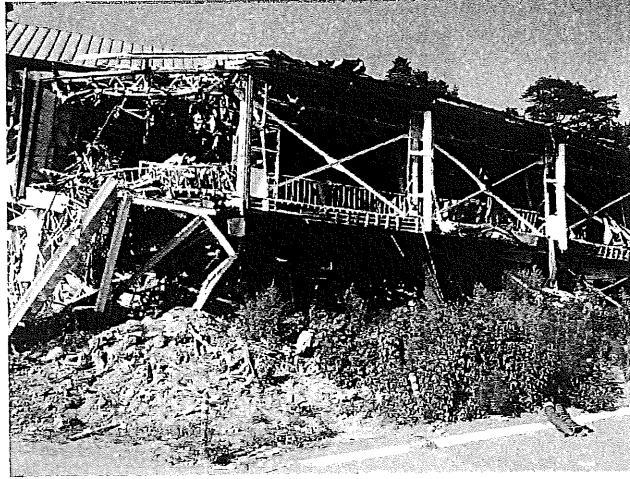
骨組みだけとなった保育園



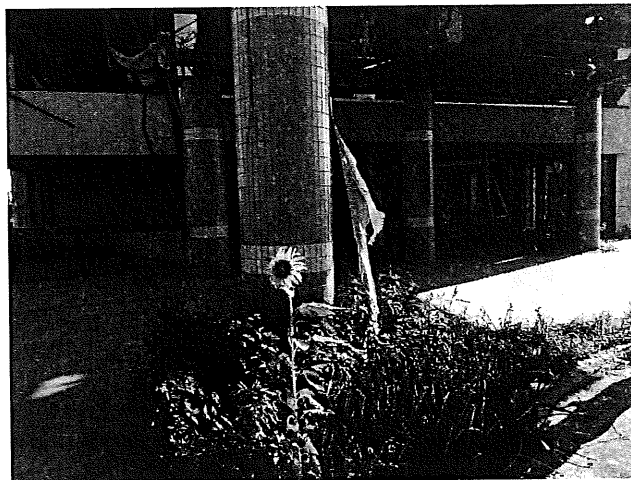
高校



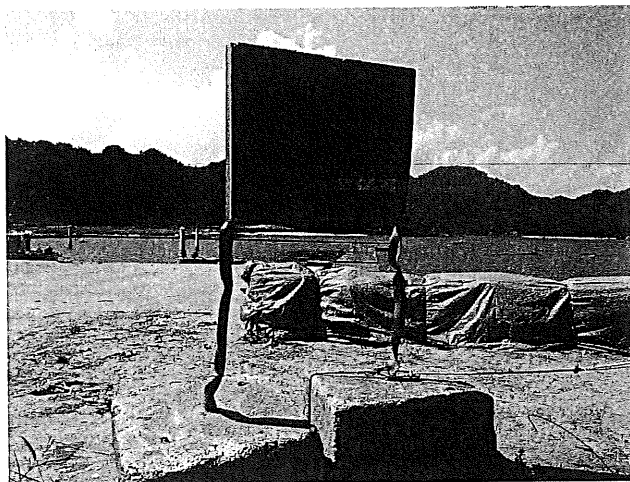
体育館



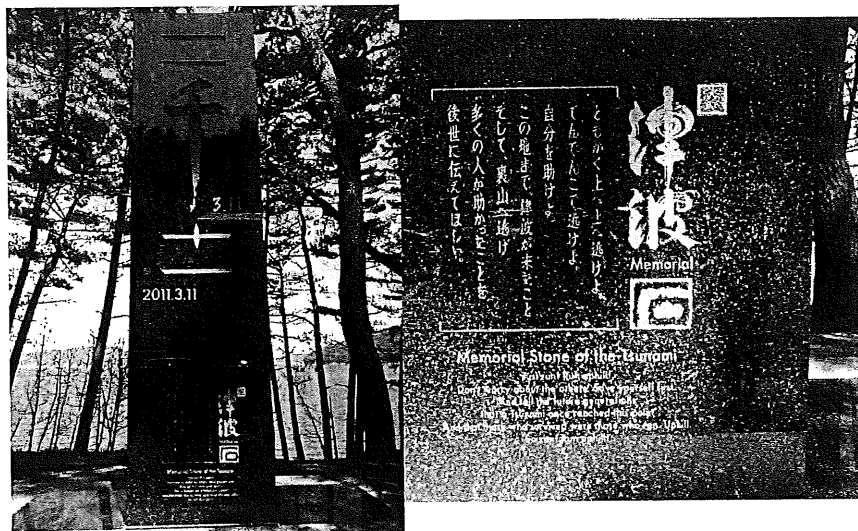
市役所 中には献花台



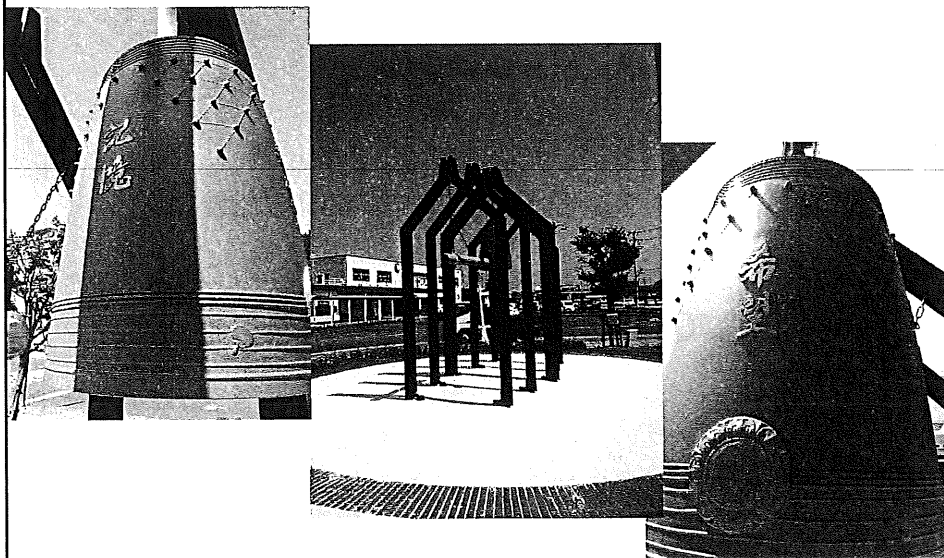
漁港の看板 防波堤は流された



津波に関する石碑



釜石駅前復興の鐘



インタビュー

就労継続支援B型事業所 青松館
サービス管理者 菅野好子さん

- 災害発生直後、避難時、その後の様子
- ボランティアについて
- 専門職への援助について
- 今回の経験から生まれた課題
- これからソーシャルワーカーを目指す私たちへ

インタビュー 大槌町地域包括支援センター 元松翠さん

- 震災発生当時の様子
- 地域包括支援センターとして行った支援
- 今も残る課題
- 震災を通して感じたこと

合同ミーティング まとめ

- 学生、教員より今回の視察、インタビューを通して感じたことの共有



- 岩手県社会福祉協議会 昆広都史さんより
- 関西福祉科学大学 遠藤 洋二先生より

学んだこと

- 視察を通して改めて知った実情
- 備える難しさ
- 日々のつながりが生きるということ
- お会いした現地のからのお言葉

さいごに

- 全体を通して
- 現在の仕事、今後を活かしていきたいこと

